琉球大学学術リポジトリ
University of the Ryukyus Repository

Title	沖縄戦をテーマにしたアートプロジェクトによる新たな平和教育 : 表現行為の生み出す教育効果と振り返り
Author(s)	金城, 満
Citation	琉球大学教育学部紀要＝Bulletin of Faculty of Education University of the Ryukyus(97): 25-33
Issue Date	2020-09
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/47067
Rights	

国立大学法人
琉球大学
University of the Ryukyus

沖縄戦をテーマにしたアートプロジェクトによる新たな平和教育
～表現行為の生み出す教育効果と振り返り～

金城　満*

New Peace Education Through an Art Project on the Theme of the Battle of Okinawa: Educational Effects of Expressive Acts and Reflection

Mitsuru KINJO*

要約

本稿は、沖縄戦をテーマにした二つのアートプロジェクトを通して実践した新たな平和教育の記録である。アートプロジェクト「石の声」、「鉄の記憶」は、沖縄の戦後史と未解決な諸問題を、高校生に自ら考えさせることをねらいとして、1996 年～ 2000 年に実施した。二つの実践とも黙々と単純に繰り返す表現行為であるが、結果として自己や他者との対話を生むことから、今後の平和教育のひとつの方向性として提案した。

キーワード：「命」「アートプロジェクト」「平和教育」「表現行為」「振り返り」

1. はじめに

本稿は、沖縄戦をテーマにした２点のアートプロジェクトについてである。はじめは高校生を対象に、美術と社会の関係について考えさせるものだった。しかし、徐々に活動が拡大して一般参加型のものとなった。具体的には筆者が 1996 ～ 2000 年に、沖縄県立開邦高等学校芸術科美術コース在職時に企画し、佐喜眞美術館とのコラボレーションで行った、「石の声・・・表現行為が導き出すもの」（以下、「石の声」）と「鉄の記憶～加害の痕跡～」（以下、「鉄の記憶」）である。

アートプロジェクトとは、作品そのものより制作のプロセスを重視したり、美術館やギャラリーから外に出て社会的な文脈でアートを捉えたり、アートを媒介に地域を活性化させようとする取り組みなどを指す 1)。

この二つの企画を行った 1996 年～ 2000 年にかけての沖縄における政治的課題、基地問題を含めた戦後の歴史問題、平和教育の課題、そして、新たな教科への取組等があった。例えば、① 1995 年 9 月、沖米兵による少女暴行事件をきっかけに戦後 50 年間の基地の整理・縮小を求めるうねり。② 沖縄戦体験者の高齢化や１フィート運動事務所問題など、これまでの平和教育から転換期。③ 平和教育のマンネリ化と、教師の若年化等、継承の難しさ。④「総合的な学習の時間」の取りみ方法の検討時期等である。

このような他府県とは異なる、沖縄の状況を取り込み、高校生に自ら考えさせるねらいを持った企画が必要とされている時期でもあった。この実践は高校生に美術を学校教育の教科の範囲だけで捉えさせるのではなく、生涯教育として自己や社会について考えさせるための手段と位置づけた。沖縄戦からはじまった共通のテーマである「命」「平和」を表現行為を通して見つめることが、結果的に平和教育と結びついた。

2.「石の声」、3.「鉄の記憶」についそれぞれプロセスの写真記録とコメントで全体像を示し、4. で二つのアートプロジェクトがもたらした共通性と、教育との関係について振り返る。

2.「石の声」（1996 年）

（1）概要

“黙々と、ただ石に番号をうつ

* 琉球大学大学院教育学研究科

その行為の数、20 余万
祈りにも似た表現行為。”

これが、「石の声」の呼びかけ文である。

沖縄、米軍普天間基地に隣接した佐喜眞美術館前広場に於て 1996 年 6 月 15、16 日で 236,095 個の石に連番を書き入れ、積み上げていくという行為が開邦高校芸術科の呼びかけで、行われた。

この数字は、96 年時点で把握されていた沖縄戦戦没者数である。しかし、二日間で終えたのは約半分。結局翌週の 22、23 日まで続行。様々な呼びかけで一般の参加者も増え、延べ六百人が参加。終了は 23 日、沖縄戦終結の日である「慰霊の日」。正午に、全員で一本ずつ線香を供え黙祷を捧げた。　猛暑の中、石を拾い、フェルトペン等でひたすら番号を書き入れていく。極端なほど単純な作業である。しかしなぜ、これほどまでに多くの人々が四日間にわたり参加したのだろうか。

石は「番号」という命をこめられ、広場の中心に積み上げられていく。はじめは、赤瓦四枚で最初の「1」を囲み、徐々に瓦を増やしながら、その中へと積み上げられていく。　やがて、その命のカタチは円錐上に小山となり、日に日に肥りだしていった。嬉しいような怖いような・・・、カタチは徐々に量感をもちはじめ、広場をのみこみはじめた。しかも、雷雨で水のはった広場に、夜、うっすらと小山が水面に映しだされ、現実の上唇と水面の下唇が重なり、ものいいたげな表情を闇の中にみせた。

「どうですか、生徒たちは石の声が聞こえたでしょうか？」・・・これが各マスコミからの共通した質問だった。

結論から言うと、「そんな、単純な問題ではない。」なぜならば、我々が耳をもっているという前提が無いからだ。今迄知識として沖縄戦戦没者数を知っていたに過ぎないし、歴史を暗記していたに過ぎないのだから。

ただ生徒も私も、石を積み上げてみて感じたことは、「耳をつくる行為」だったように思う。これは、他の参加者にも共通した思いであろう。

（２）写真記録でみる方法と経過（以下連続３P）

1996年6月15、16日で236.095個の石に連番を書き入れ、積み上げていくという行為が開邦高校芸術科の呼びかけで、行われた。これはその記録である。↓

最初の「1」を書き入れる
佐喜眞道夫美術館館長

囲いは4枚づつ増やされ・・
初日で終えたのは、28500個。全体の1割強である。

猛暑の中、ひたすら石をひろい続け、

全てはこの「1」から始まった

計画の甘さと無謀さ、傲慢さ、

一袋に200個づつ入れ、

赤瓦で囲み、
徐々に瓦を増やしながら、

やり始めたことの重大さを思い知る。

ひたすら番号を書き入れていく。

その中へと積み上げられていく。

┣2日目-（1996/6/16）

その日は、強い日差しで始まった。

しかしなぜ、これほどまでに多くの人々が参加したのだろう。

石は「番号」という命をこめられ、泡盛で供養された。

やがてその命は、囲みから溢れ出る。

前日の汗のカタチ

単純な表現行為が・・・

「観念」が、汗、手まめ、疲労と
身体全体を通して考えた、

円錐状に小山となり、

石コロと命とを重ね合わせた。

「事」になった。

日に日に肥りだしていった。

午後４時、
目標の半分にも満たない進行状況

嬉しいような怖いような・・・

不安や焦り、単なる義務感
からではなく
参加者の気持ちはさらに
翌週へと、

-３日目-（1996/6/22）

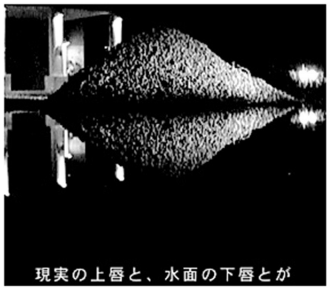
その日は、雷雨で始まった。

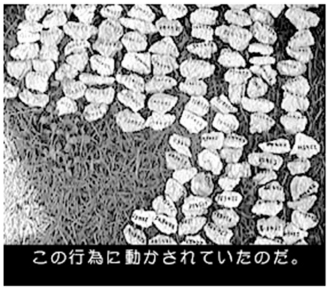
そのカタチは徐々に量感をもちはじめ

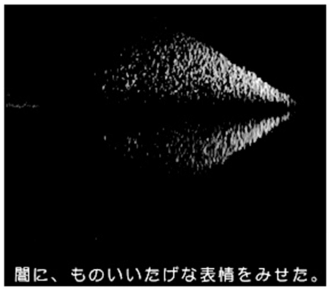
続行であった。

やがて、その命のカタチは、

広場をのみこみはじめた。







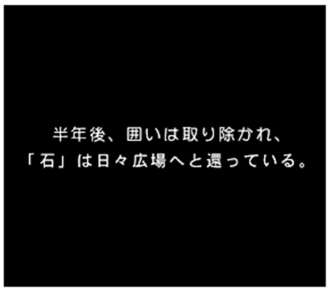
「石の声」は、

そんな「耳をつくる行為」

だったのではないだろうか。

-最終日-（1996/6/23）

慰霊の日



最終的に、この表現行為が平和教育と結びつき「新しいかたち」と評されたが、着想の時点では、もっと芸術行為そのものに重きをおいており、「なるべく単純で膨大な繰り返しの作業」を通して自分そのものと向き合うことを目的としていた。作業が単純であればあるほど、人はそのリズムの中に入り込み寡黙になる。黙らざるをえないと言うことは、自分と向き合い対話する。「炎天下、流れるような汗」、「雷雨にうたれ石に番号が書けない」などの様々に変化する状況下で、生徒たちにも変化がみられた。生徒だけでなく一般の方にも。積み上げる石を納骨するようにそっとおく人や、小山のそばに座り込み撫でる人、ボーと日が暮れてもその場から動けないでいる人。様々である。

これらの出来事を見て思うことは、単純な表現行為が「祈り」になり、石コロが戦没者一人一人と重なり、「数」がより実感をもった「量」に変化し、「観念」が汗、手のまめ、疲労、身体全体を通して考えた「事」になった。ほんの少しだけだがそう思った。

芸術が力を持ち、現実とかかわれるのは、人の生き死にと、深くかかわった時なのだと･･･闇の中に積み上げられた「唇」がほんの少し揺れ、囁いているのを、見逃さない目と、その声をきく「耳」を、積み上げたいと思った。

追記：半年後、「囲い」は取り除かれ「石」は日々、広場に還っている。

3.「鉄の記憶」（1999 ～ 2000 年）

（1）概要

1996 年の「石の声」の趣旨を発展させて行ったアートプロジェクトである。当時、普及が進んだインターネットを利用して、その趣旨や状況をその都度発信、県内外へも参加を呼びかけて、全国的な参加型のプロジェクトを試みた。進捗状況を発信するスタイルから公開進行型とも呼ぶ事が出来る。この様に、参加型または公開進行型の波及効果を取り込むことで、新たな平和教育としての可能性も拡がると考えた。その呼びかけ文とポスター（図 1）は以下の通りである。

（2）呼びかけと趣旨

“木片に釘を、ひたすら打ち込んでいく表現行為。それを「鉄の記憶」と呼ぶ。

沖縄戦では、その激しさを「鉄の暴風」と形容するように、日米あわせ 20 万 t もの砲弾・爆弾等が使用されたといわれる。この量は沖縄戦戦没者 23 万余から考えると、人ひとりを 1t の「鉄」で殺害したことになる。またその 5％の 1 万 t が不発弾として残され、戦後様々な不発弾事故が起きてきた。今日まで不発弾対策は進められてきたが、未だ 3 千 t が地中に眠っているとみられている。ここでは砲弾・爆弾等と釘とを対応させ、「暴力としての鉄」をテーマにする。あえて、1 本数 g の釘を打ち込むことで、行為の本質を考え、人間の中に「眠っているもの」を確認するというものである。また同様に、戦後の課題として残された平和資料館問題、基地移設問題等も、多角的に見据えていく機会として、この表現行為を行う。”

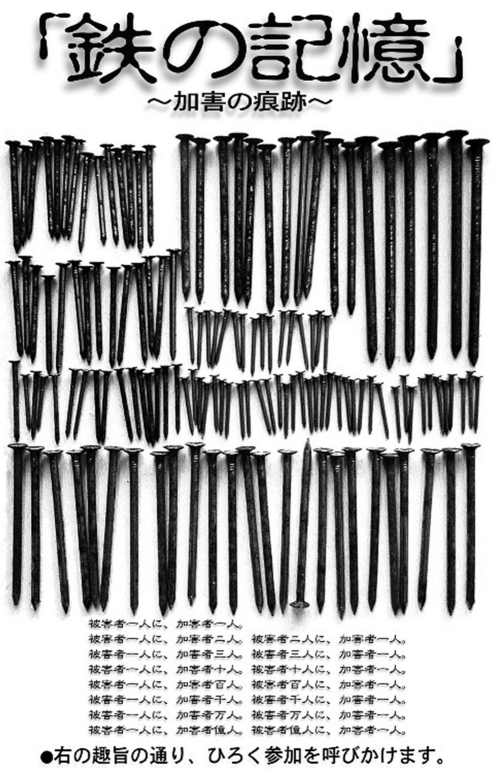


図 1　参加呼びかけのポスター

（3）目的

沖縄戦では日米あわせ 20 万 t もの砲弾・爆弾等が使用されたといわれる。それらの鉄と、釘とを対応させ「暴力としての鉄」がテーマである。参加方法は木片に釘を、打ち込んでいく表現行為（図 2）で、「鉄の記憶」と呼び 1 年間続いた。その間、進捗状況を公開し、最後は火葬する事で 20 世紀の暴力を永眠させることを目的とした。

（4）参加方法

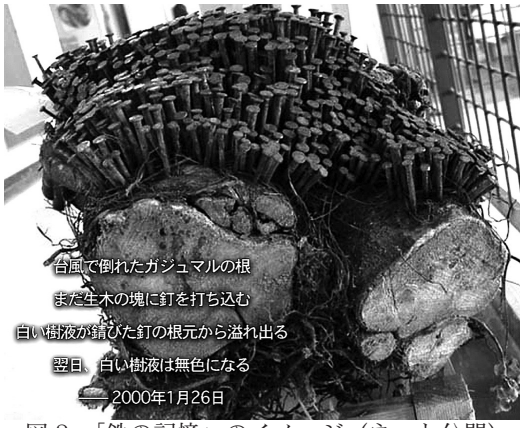


図２　「鉄の記憶」のイメージ（ネット公開）

①ここでの木片とは板、間伐材、台風で折れた枝等何でもよく、釘も種類やサイズを問わない。

②数量は、沖縄戦での不発弾を元に展開するが、明確な数字的目標を設定するのではなく、「膨大な物量」ととらえ、出来うるかぎりの行為を繰り返すことで、「加害と被害」の両面を考えていく。

③上記の期間、いつでもどこでも個人でも団体でも可能で、趣旨をふまえ、ひたすら釘を打ち込む。

④最終的に「鉄の記憶」は、次の事項を書き込んで直接持ち込むか、郵送。・住所氏名（書ける範囲でかまいません。例：大阪府、比嘉）団体は団体名を直接木片に書込む。・釘の本数を、直接木片に書込む。・取り組みの写真等を添えてもよい。

⑤「膨大な物量」と捉えた釘をハンマーで打ち込む。衝撃が手に「ズシン、ガツン」と直接伝わる行為を繰り返す。その時間と感触から「加害と被害」の本質を考える。

⑥「鉄の記憶」は、参加者、数量、地域等のデータの記録を添え展示(展示場所は調整中)。その後、木片の大部分は火葬。焼き残った「釘と灰」は記録とともに、「加害の痕跡」として佐喜眞美術館に展示、収蔵される。

⑦開始から１年後、集約された「鉄の記憶」は、参加者、数量、地域等のデータの記録を添え校内展示を行った。その後木片は、自らに潜む暴力性を自認し葬り去る意図で火葬した。焼き残った「釘と灰」は記録とともに、「加害の痕跡」として佐喜眞美術館に常設展示、収蔵された。

（5）期間

今の段階（1999 年 10 月末）では 2000 年５月初旬までを釘うち期間とし、その後の予定は、開邦高校ホームページにてその都度連絡呼びかけを行い、進行状況を公開していく。

（6）インターネットで発信して経過報告

インターネットを利用して、全国的に呼びかけ、参加型アートプロジェクトと平和教育の試みである。進行状況を公開する。この様な公開進行型の表現行為がもたらすと思われる、波及効果を表現に取り込む。

（7）定期的に進捗状況を更新

以下

ネット上で呼びかけを行い、趣旨に賛同してくださった皆さんから沢山の支援を頂きました。ここでは経過報告と連絡をしていました。その中からの抜粋です。

● 1999 年 12 月

「呼びかけ文」の趣旨で開始

● 2000 年２月

開始から３ヶ月が経過してのお知らせ

現在の進行状況は次のとおりです。

・このホームページの写真でも分かるとおり地道に打ちつづけられています

・問い合わせ、参加の意思表示はあるものの、実物の郵送や持ち込みはまだありません

・マスコミが３社報道、呼びかけをしてくれるそうです

・参加方法が分かりにくいとの問い合わせと、やった実感から下記の様に方法を変更しました

●参加方法の変更

パンフレットの参加方法の 2. に「釘の本数を、直接木片に書込む。」とありますが、釘の本数を数えることのマイナス面の方が出てきました。例えば、数のカウントの方にだけ気持ちがいって、「加害」の本質を考えるという面が弱くなる点です。従って、打った釘の数を数えるのはやめ、「釘を打ち込む行為」そのものの重要さに目をむけることに改めます。どんどん打ってください。なお、100、1000 と単位を設定してやっている場合は、それでもかまいません。

● 2000 年６月８日

開始から半年・・・

この表現行為は 99 年 10 月末に開始し、2000 年６月「慰霊の日」あたりを終了予定として進めてきました。さて、半年がたち、少し変化が出て

きました。

本校内でも積極的に、熱心に釘を打ち続けているという状況ではありません。その理由として、予想に反しそんなに沢山打てないということです。あくまでも「加害行為」を想定しての表現なだけに、ある程度を越えたとこで手が止まってしまうのです。

●開始した半年前と大きく変わった点

17 歳前後の年齢が起こす事件です。今までとの大きな違いは連続性でしょう。中には、「人を殺す経験をしてみたかった」等。「鉄の記憶」での加害が、あえて加害側に立つことで被害の再認識と、誰もが持ちうる暴力性の自覚に目的があったわけだが、ここでは経験そのものが目的だったり、主張のみが意図だったりと、一見異質に思えますが、簡単に結論づけたりは出来ません。むしろ「暴力の純度」が高まっていると考えることも出来ないでしょうか？

本校では文化祭や、「慰霊の日」を前に、更に掘り下げたテーマで展開できないか模索中です。その一つが本校図書館で例年行っている、沖縄戦の写真パネル展との合同企画です。

●期間延長と今後の予定について

前記の進捗状況からも明らかな様に、まだ中途半端な取り組みになっています。これは、ある意味では正常な反応とも考えられます。何故なら加害行為としての釘打ちを頑張ったり、ハリキッタリ出来る事自体この表現行為の趣旨に反することにもなるのですから。そんな矛盾を孕んだ行為なだけに、もう少し時間をかける必要を感じています。そうは言っても期間を、開始からちょうど１年後の 2000 年 10 月末までとし、最終的には火を放ち、灰と鉄に変えることで、20 世紀の暴力への「火葬・納骨」の テーマを含めたいと考えています。

その後、佐喜眞美術館へ灰と釘を展示保存してもらう計画です。賛同してくださっている皆さんへ今後の予定でもふれた通り引き続き行ってください。中には 6 月末の文化祭で取り組みたい等の希望の学校もありました。また、下記のように取り組みの写真等も送っていただければ幸いです。

（9）火葬式

約１年間行ってきた「鉄の記憶」を火葬する事

図３ 開邦高校運動場での火葬式は一昼夜続いた

で 20 世紀の暴力を永眠させることを目的とした式である（図３）。火葬の対象であり、喪主でもある自分自身。その中にも潜む暴力性を葬り去るために参列者は、線香を手向け祈りを捧げた（図４）。

図４　火葬式での焼香

葬儀への参加は黒枠広告で呼びかけた（図５）。

「鉄の記憶」火葬式のお知らせ

「鉄の記憶」

「二十世紀の暴力」の「加害と被害」の本質を表現行為で考える目的で昨年十月より行なって参りました

ここに　その「暴力」を永眠させると同時に　次世紀の平和学習の方法を模索し　行為中のご厚誼を深謝し謹んでお知らせ致します

尚　火葬式は左記の通り

一、日　時　十二月二日（土）午後　一時から一時半

一、場　所　南風原町字新川６４６番地開邦高校グランド

＊式順その後の日程地図参照

勝手乍らご供花の儀はご辞退申し上げます

火葬後の釘と灰は佐喜眞美術館にて

「加害の痕跡」として展示収蔵されます

企画　開邦高校芸術科有志

支援　佐喜眞美術館

（式順）

一、開式の言葉

二、生徒を代表して

三、経過報告

四、黙とう

五、着火

六、閉式の言葉

その後燃えきるまで火全に気を配り

行（火葬式行なわれる敷に対応する）

司会　芸術科生徒

図５　黒枠広告をネットに掲載し呼びかけた

４. まとめ

以下に、アートプロジェクトを取り込んだ教育の可能性について振り返り、そこから明らかになった成果と課題を通して、本実践から得られた教育の方法と効果に関する新たな発見について検証する。沖縄戦をテーマにした二つのアートプロ

ジェクトは、なぜそこで行うのか、場の設定が重要である。「石の声」は佐喜眞美術館の立地や設立の経緯が重要であり、「鉄の記憶」はインターネットによる場の拡張性により、全国どこからでも参加を可能にした。２点ともテーマがはじめから明確で、全て見通せていたわけではない。参加者自らが早くその姿を見てみたいと、思わせる仕掛けが重要である。その推進力がテーマを実態化させて場が変容し、その場で行う必然性が見えてくる。

以下、①～③を共通点として挙げる。

①沖縄の戦後史と未解決な諸問題

まず遺骨未収集、基地、不発弾処理、などの直接沖縄戦が残した問題と、その後のハンディキャップが一因の、貧困や経済や教育の問題点。

②「加害と被害」

石にナンバリングする静的な行為と、釘を打つという動的な行為。いずれも人の内面に潜む多様な感情を行為そのものから見つめようとした。同じ動作の積み重ねで、自分と向き合い対話する点である。さらに、石や鉄と“実際に物に触れながら他者とも対話する点”、しかし、“すぐには答えが出ない”という点。

③表現行為と平和教育

被害や加害の歴史を消し去ろうとするのではなく、表現行為を通して自己との対話を深め、自分の内面に気付くきっかけを石と鉄に託し、そして人間の本質を見つめる機会とした点。

一方、「鉄の記憶」の「石の声」との相違点はインターネットの可能性をアートプロジェクトで実験した点である。インターネットで全国の参加者を募り、木片に鉄の釘を打ち込む表現行為と沖縄戦での「鉄の暴風」を重ね合わせて呼びかけた。

この二つのアートプロジェクトから、アートの持つ可能性や潜在力が沖縄特有の歴史や戦後処理問題、様々な要素を呑み込みながら拡大し、結果的に両者の境界面に平和教育という形が出現した。さらに沖縄に今もなお継続している基地問題という構造的な暴力に対して、生徒に比喩的に分かり易く、その構造を主体的に学ばせることは沖縄の将来にとって重要である。なぜならば、沖縄戦体験者は高齢化が進み 2013 年時点で県民の 17％にまで減少している。例えば、体験者の語り部による活動、沖縄戦の記録映像を収集保管した１フィート運動事務所（2013 年解散）など、相次いで縮小の動きがある。これらの例からも平和教育の継承と、主体的に学べる新たな教育プログラムの開発が急務である。筆者はこの二つの実践から、美術教育とアートプロジェクトを融合した平和教育が、今後も必要だと考えている。また、このプロセスは個別の事象の理解と、全体を統合して表現する力が必要な事から、環境教育に対するプログラムの構築にも有効だと考え、今後の重要なテーマとして取り組んでいきたい。

最後に、表現行為が空間や時間を超えて共有出来る事が証明出来た。火葬して残った灰と釘は「加害の痕跡」として校内展示により、一年間の表現行為を全校生徒で振りかえった。その後、佐喜眞美術館へ展示され、「鉄の記憶」は「加害の痕跡」として保存されている。

註

1)『現代美術用語辞 ver.2.0 』アートスケープ,
https://artscape.jp/artword/index.php/
アート・プロジェクト（2020 年 5 月 21 日閲覧）